登立地区における
地域コミュニティの継続性に関する研究

川畑　明日香[1]・田中　尚人[2]

[1]学生会員　熊本大学　工学部社会環境工学科（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）
E-mail:ask.k.1612@gmail.com

[2]正会員　熊本大学准教授　熊本創生推進機構（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）
E-mail:naotot@kumamoto-u.ac.jp

近年地方都市では，コミュニティの衰退や減少により過疎化が進んでおり，集落の維持にはコミュニティの存続が不可欠である．本研究の目的は，熊本県上天草市大矢野町の港町である登立地区の生活環境の変遷や地域活動に着目して現状や歴史について分析し，地域コミュニティを存続させるための要因を明らかにすることである．そのために，登立商店街地区を中心とした生活環境の変遷と古くから行われてきた伝統的風習についてそれぞれ整理し，現況に至った経緯を分析した．その結果，登立地区の地域コミュニティを存続させるための要因は，地域らしさを形成することであると分かった．

Key Words : *local identity,port town,transition of land used,transition of local activities, life style*

1.　はじめに

(1)　本研究の背景・目的

近年地方都市では，人口減少や少子高齢化による過疎化が進んでいる．集落の機能を消失させないためには地域コミュニティの維持が必要であるが，住民の地域活動に対する関心の低さや，都市部への人口流出が問題視されている[1]．さらに，集落の機能が低下すると，地域活動も減少する．特に従来から地域の中心部に位置し，まちの変遷に影響を与える商店街では，後継者不足や大型スーパーの普及による需要の低下等によりシャッター街が多くなり，商店街としての機能を果たさなくなる．

また，地域行事の運営や継承にはコミュニティとしての活動が必要である．伝統行事を無形の文化財として扱い，存続や継承のための条例等が定められている地域もあるが，目に見える有形の文化財や資産の維持と異なり，維持するための有効な対策がとられていない[2]．

本研究の対象地である熊本県上天草市大矢野町に位置する登立地区でも，都市部への人口流出やコミュニティの機能の低下，商店街の衰退という過疎地域に共通して見られる問題点がある．

本研究では，登立地区の生活環境の変遷と地域活動に着目し，現状や歴史について整理することで，現況に至った経緯を分析した．そして，地域コミュニティを存続させるための要因を明らかにすることを目的とした．

(2)　本研究の位置づけ

コミュニティに関する研究として，大森ら[3]は，熊本県益城町平田地区のお祭りであるお法度祭について文化的景観に着目し，歴史・空間・生活の関係性についてまとめ，農村コミュニティの変化を明らかにした．

コミュニティと伝統行事の関係性についての研究として，根岸ら[4]は，祭りが地域の伝統文化として地域運営に与えている影響を示すためまちの歴史的変遷や現在の地域運営体制についてまとめ，現代における地域と地域固有のアイデンティティとの関係性を明らかにした．

商店街に関わるコミュニティと伝統行事の関係性を分析した研究として，木田ら[5]は，祭りの運営に関わる商店街組織と地縁組織を追い，祭りの運営において組織間の連携による社会資本構築のプロセスを明らかにした．

以上より，コミュニティに関する論文において，地域活動や伝統行事の運営の為に，地域コミュニティの変化や特性を明らかにした研究は多く見られたが，過疎地域において地域特有の地域活動の変遷過程や現況から，地域コミュニティの存続や継続性に関して分析し述べた論文は少ない．よって本研究では，都市構造や生活環境の変遷を基に，登立地区特有の地域活動に着目し地域コミュニティの存続要因を明らかにしたことが特徴である．

2. 登立地区の都市構造とその変遷

(1) 概要

天草諸島は大小 100 余りの島からなり，総面積 886 ㎢の離島群である．その中でも上天草市は九州本土に近い位置にある．登立地区は，熊本市から南西 50km に位置する上天草市の北東部にある大矢野町に属しており，天草の玄関口となっている（**図-1**）．

また，2015 年の国勢調査によると，上天草市の総人口は 27,066 人であり，うち大矢野町の総人口は 13,708 人であった．**図-2** に人口の推移を年代ごとに積み上げグラフに示した．総人口は年々減少を続けている中で，若年層が大幅に減少し高年層が増加したことから，登立地区では，人口減少や少子高齢化が進んでいると言える．また，1965 年から 1970 年の人口の変化が大きいことが分かる．原因として，同時期に交通網が発達し，都心部への人口流出が容易になったことが原因と考えられる．

(2) 天草五橋による影響

数多くの島を持つ天草地方では，長年交通手段の面で問題を抱えてきた．特に，船が欠航すると，特産物の搬出や生活物資の移入の停滞が起こる等島民の生活に影響を及ぼし，経済面にも大きな悪影響を与えた．

1950 年ごろからの戦後の社会情勢の安定化とともに大矢野町でも都市部への人口流出が徐々に始まった．これは離島に限ってのことではなかったが，産業面だけでなく消防団や祭りの担い手不足となり地域コミュニティの維持にも影響が出始めた．天草地方で九州本土に一番近い大矢野島は，離島であるが故の問題点からの脱却を架橋によって成し遂げようとした．その結果，1966 年に天草五橋が開通した．

五橋の開通は観光面にも影響があったが，長くは続かなかった．登立商店街では，新国道であるパールラインがその裏側を通るため観光客は素通りであった．

さらに，登立丸として慣れ親しんだ登立−三角の定期航路は五橋開通後半年間で乗客の利用がこれまでの 3 分の 1 に減少した．外部からの利用客は減少し，主に通学生，通勤者及び港周辺の人の利用のみとなった．

(3) 交通網の変遷

登立が交通の要衝になった理由の 1 つに，1887 年に三角港が開港し，三角−登立間の航路が誕生したことがある．1899 年の九州鉄道三角線開通に伴い，この航路はさらに重要性を増し，頻繁に使われるようになった．また，登立港に面する道路は五橋開通前まで主要道路として使われていた．しかし，天草五橋が開通し，五橋を連ねるパールラインが開設されたことにより主要道路が変化した．生産物を船舶利用（三角中継）せず，トラックによる輸送で熊本・八代・福岡へ出荷できるようになったことで，港を経由する必要性が無くなり，登立港は痛手を受けた．近年でも大矢野バイパスが開設される等，さらに流通における利便性は良くなっている．

図-1 登立地区の位置

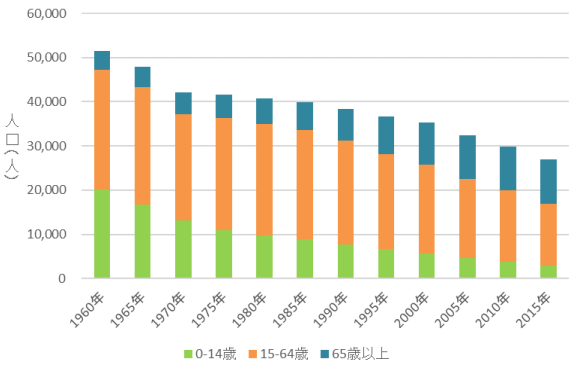

図-2 年代別人口の推移

また，五橋開通による主要道路の変化の地図を**図-3**，**図-4**[6]に示した．**図-3** は 1954 年のもので**図-4** は 1971 年のものである．1954 年には三角-登立間の航路を利用していた．しかし，五橋開通後の 1971 年には九州本土から大矢野島を経由した天草本土までの経路が 1 本の道になった．よって車での通行量が増加し，物流も車両で行われるようになった．天草五橋の開通は，交通の面では人々の暮らしの利便性を高めたと言える．

(4) まとめ

本節では，登立地区の成り立ちについて整理し確認できた事柄について，交通，産業，行政の 3 項目に分け，年表を作成した（**表-1**）．本章より，明治時代には，地区の分離や統合が多く行われ，多くの産業の組合が設立されたことから，この頃から産業が栄え始めたことが読み取れる．その後，1925 年に町制施工により登立村が登立町になったことでこの動きも落ち着いた．1954 年には，町村合併により大矢野町が誕生したため，各地区の組合が合併する動きが見られた．1950 年代以降は交通網が変化し始め，1951 年には登立と各方面の間にバ

スの開通，1966 年には天草五橋が開通した．近年の動きとしては，2004 年に大矢野町を含む 4 町の合併による上天草市が誕生したことが大きな出来事であった．

以上より，登立地区は，以前は交通の要衝であった登立港により産業が栄え，港付近が賑わう地域であったが，現在は道路網の発展により登立港発着の航路は使用されず，港付近の賑わいを失ったという都市構造の変遷が明らかとなった．

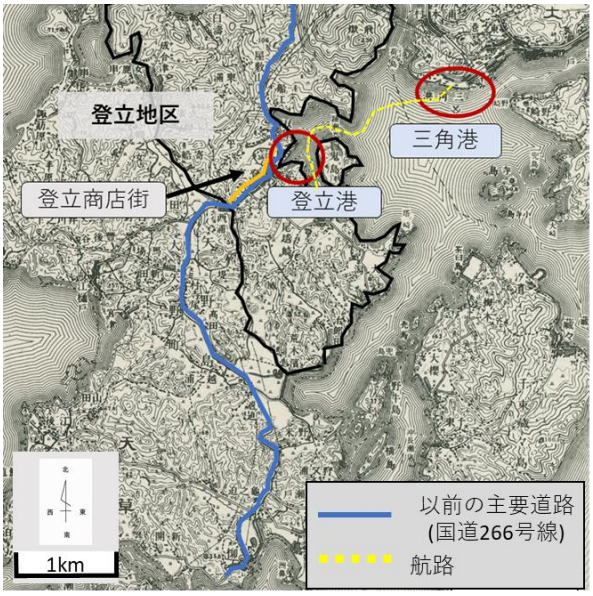

図-3　五橋開通前（1954 年）

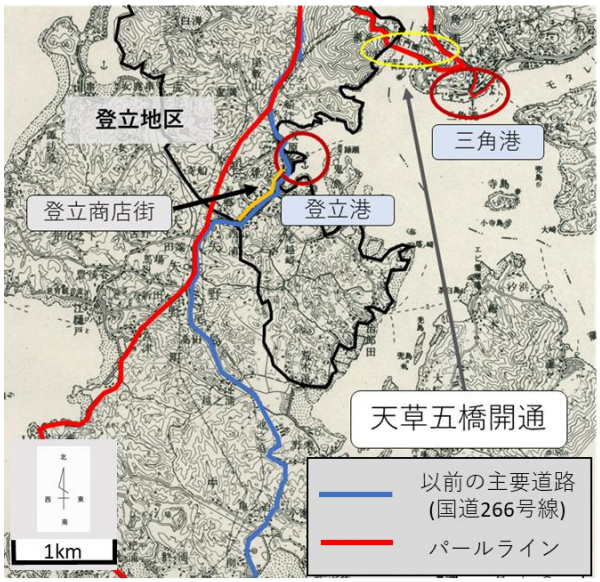

図-4　五橋開通後（1971 年）

表-1　行政・交通・産業に着目した大矢野町の歴史年表

年号(年)	行政	交通	産業
1883(明治16)		三角築港および道路建設を県議会で決定	
1884(明治19)		熊本ー三角間の道路が開発	
1885(明治20)		**三角港開港式**	
1889(明治24)		三角港の開港	天草郡農会設立
1891(明治26)			天草郡漁業組合が創立
1903(明治36)		組合等コミュニティの増加	上村漁業組合設立 維和村漁業組合設立
1904(明治37)			稚蚕共同飼育組合が上村に設置
1908(明治41)			大矢野産牛組合が設立
1911(明治44)			上村漁業協同組合創立
1917(大正6)			大矢野地区5カ村の漁業組合の運営
1918(大正8)			酪農家、「蓄産組合法」に基づいて組合を作る
1922(大正11)			天草畜産組合が設立
1925(大正14)	登立村が町制施工し，**登立町の誕生**		
1951(昭和26)		大矢野登立ー江桶戸、登立ー柳、登立ー成合津間に**バス開通**	
1954(昭和29)	町村合併により**大矢野町誕生**		
1956(昭和31)		天草架橋の本格的な現地調査が始まる	
1961(昭和36)			大矢野町農協が誕生 登立・上・中・維和・湯島**農協が合併**
1962(昭和37)		天草架橋起工式	
1963(昭和38)		天草架橋の１・２・４号橋の着工式が4号橋架橋地点で実	
1964(昭和39)	町合併10周年、天草架橋起工記念式典を挙行する		町村合併による組合の合併
1966(昭和41)		5号橋連結。九州本土と天草諸島がつながる。（3月） **天草五橋開通式**（9月）	
1967(昭和42)		天草五橋、1日に平均4000台の車が通過	
1968(昭和43)			**5漁協が合併**して、大矢野町漁協が誕生
1969(昭和44)	影響大	天草五橋架橋の動き	第1次農業構造改善事業完了
1970(昭和45)			第2次農業構造改善、事業計画指定地区となる
1971(昭和46)	**過疎地域**に指定される		
1972(昭和47)			
2001(平成13)	4町合併に関する住民説明会が始まる		
2002(平成14)	新市の名称を「上天草市」に決定する	4町村合併の動き	
2003(平成15)	総務省が官報に新市名の上天草市を告示		
2004(平成16)	**上天草市誕生**		

3. 登立商店街周辺の暮らしの変遷

(1) 調査概要

本研究では，調査の手法として文献調査，現地調査，ヒアリング調査を行った．

文献調査として，上天草市史大矢野町編として書かれている「天草の門」[7]「島の暮らしと祭り」[8]より登立地区の暮らしに関する情報を抽出した．さらに，商店街に関する診断報告書[9]より 1972 年の登立商店街の状況に関する内容を調べた．現地調査として，3 回のワークショップ，2 回のまち歩き及び 2 回の現地訪問を行った．ヒアリング調査として，11 月 23 日に，商店街 6 地区のうち，尾ノ上地区区長の A 氏，本郷地区区長の B 氏，新田地区区長の C 氏にご協力を頂き，ヒアリング調査を行った．主に，登立商店街地区の暮らしに関することや次章で扱う登立地区での伝統的な祭りや風習に関することをインタビューした．

(2) 登立商店街地区の暮らしの変遷

登立商店街は，登立港付近に位置する全長 1400m の商店街であり，隣を通る国道 266 号線を挟んで北部と南部に分かれている．本節では，交通，港，コミュニティに着目し，主にヒアリング調査の結果を基にそれぞれの着眼点から登立商店街地区の暮らしの変遷を整理した．

a) 交通面の影響による暮らしの変遷

1966 年に開通した天草五橋の影響により，天草の交通体系は変化し，住民の生活も変わった．交通面の影響により，商店街周辺の生活環境も変化した．特に，五橋架橋により天草市方面まで続くパールラインが開通し，主要道路が変化したことで，これまでになかった大規模のスーパーや物産館等が増加した．さらに，郵便局や銀行等も商店街付近からパールライン付近に移転した．よって登立商店街では閉店する店舗も多く，急速に衰退していった．

登立商店街は，1980 年代にすでに衰退していたとは言えども，店舗自体が消失したものばかりではなく，当時移転した店が何件もあったことや大型スーパーができたことから，単なる人口減少等による衰退ではなく，五橋の架橋による交通網の変化が及ぼした様々な面での影響があることが明らかになった．

b) 港町としての暮らしの変遷

登立地区が港町として栄えていた 1955 年頃は，登立港は産業の窓口となっていた．三角に鉄道が通り，三角大矢野間の移動を登立丸という船で行っていた．1 号橋架橋以前は，中学生の集団就職の際に登立港から出発することが多かった．大矢野町の中学校では，生徒が 3 年生になり就職が決まると，登立港から旅立っていた．同じ大矢野町の上地区や中地区からも引率の先生に連れられて登立港から登立丸に乗り，家族や後輩に見守られ，出て行っていた．さらに，物流も三角から登立港を経由し，その後各商店に配られていた．また，バス等の事務所も登立港付近にあった．登立地区は，港のある地域として，大矢野島の中では交通や物流の起点となっていた．

このように，登立地区は以前は港町として重要な役割を担っていたことが分かるが，現在では前章で述べたようにパールラインが開通する等の影響もあり，交通や物流の起点でなくなった．また，登立港の港としての役割が薄れたことにより，都心部への人口流出も増加した．それ以降，徐々に商店街は衰退し，かつての賑わいを失った．

c) コミュニティの変化

登立商店街地区のコミュニティとして，以前は地区ごとに青年団があり，活動を行っていたようだが，大矢野町が上天草市に合併した際に青年団は上天草市青年団となった．それから数年は活動を行っていたが，徐々に若い年代の人口も減少していき，青年団の活動も行われなくなっていった．若い世代が都心部の他地域へ就職できるようになり就職の幅が広がったため，就職時に地元を離れる人が多く，ますます少子高齢化が進み若者が減ったのである．

また，商店街地区が賑わっていた昭和中期頃は地区ごとに婦人会や子ども会も存在していた．子ども会は，現在も地区によっては存在しているが，ほとんど活動が滞っているという現状にある．数十年前は，婦人会に入ることが名誉であり，活動も頻繁に行われていた．また，子ども会ではバスを貸し切り，皆で遊園地に出かける等集団での活動が行われていた．登立商店街地区の現状として，婦人会や子供会は，存在する地域も少なくなり，活動はほとんど行われていない．

(3) 登立商店街の変遷と現況

本節では，地図上から登立商店街地区周辺の生活環境の変遷を分析した．そして，商店街地区が現在の姿に至るまでの経緯を明らかにした．

時代の変化に伴って商店街周辺の環境がどのように変化してきたかを明らかにするために，文献調査及び現地調査を行った．調査によって得られた結果を**図-5** 及び**図-6** に示した．**図-5** は，昭和 47 年当時の商店街の店舗状況を示し，**図-6** は，現在の商店街の店舗状況を示している．

この結果から，昭和 47 年当時の商店街は，まだ多くの店舗が存在していたことが分かり，店舗の数は 90 店舗近くであった．当時の登立商店街は，店舗のレベル格差や共同施設の貧弱さが問題だった．飲食店やサービス店が少なく，主に地域の人に需要があったことが考えら

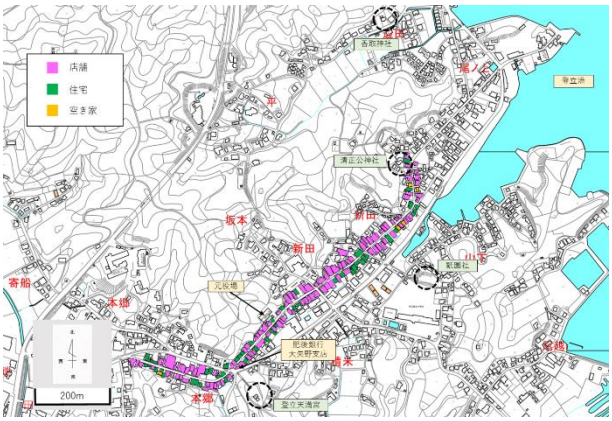

図-5　1972 年（昭和 47 年）の登立商店街の店舗状況

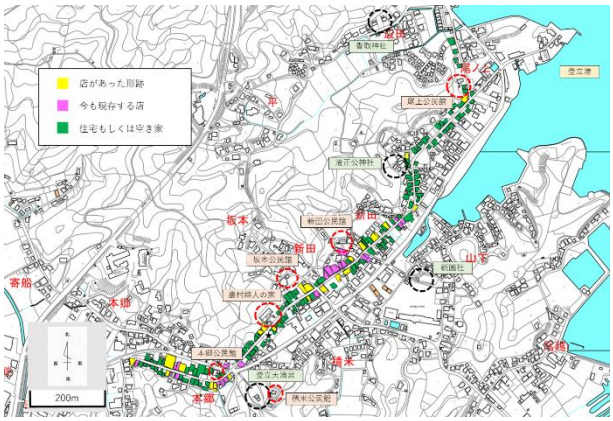

図-6　現在（2020 年）の登立商店街の店舗状況

れる．一方で，天草五橋の架橋により本土との行き来が容易になったにもかかわらず観光客の受け入れ態勢の未整備だったことも問題であった．

また，現在の登立商店街は，明らかに住宅もしくは空き家の数が多いことが読み取れる．つまり，ほとんど商店街として機能していない状況にある．以下に，商店街の現状の写真を 4 枚示した（**写真-1**，2，3，4）．

また，現存している店舗は，登立外の地域へ売り出している等，他地域からの需要により成り立っており，閉鎖されてる店舗は，需要の低下や後継者不足といった原因が挙げられる．

(4)　まとめ

本章では，登立商店街地区の生活環境の変遷について明らかにした．登立地区は，様々な面からの影響により，かつての賑わいを失ったことが分かった．また，1971 年と 2019 年の 2 つの年代の商店街の様子を比べ，変化の様子を考察した結果，店舗の数が減少していることが分かり，商店街としての機能の低下が見られた．これには，インフラの変化による外部要因と，その外部要因による暮らしの変遷への対応ができなかったという内部要因の両方の理由が考えられると分析した．

4.　伝統行事に着目した地域コミュニティの継続性に関する考察

(1)　登立地区の伝統行事の概要

本節では，登立地区の伝統行事のうち，ハツカエビスと登立天満宮の夏祭りの 2 つのお祭りに着目し，概要をまとめた．

a)　ハツカエビス

登立商店街の活動の 1 つとして，ハツカエビスという行事が行われていた．毎年 11 月 20 日に主に登立商店街

写真-1　現在の商店街の様子

写真-2　現存する店舗

写真-3　店舗があった形跡

写真-4　新しくできた店舗

で行われていたもので，漁業の神様であるエビス様にちなんで，エビス仰によって商店街に客を呼ぼうという関西発祥の行事と言われている．店舗の 2 階に登り，餅・みかん・お菓子・軍手・海苔・袋入りラーメン・花の種など様々なものを投げ，その時間については 2，3 日前にチラシ等で告知されていた．ハツカエビス当日は小学生も参加しており，地域一体となって行われていた伝統ある行事であったことが考えられる．

また，本郷から坂本，積米，新田，という形で，区ごとに時間を区切って開始していた．現登立郵便局辺りから商店街を北上し，現パチンコ店辺りまで順番に投げていた．**図-7** にそのルートを示した．地元登立地区のみならず，大矢野全域から人が押し寄せていた．他の地域でもハツカエビスは行われていたが，登立地区では他地区と比べ，豪華なものが手に入ることから他地区の住民には登立地区のハツカエビスが良いと羨ましがられていた．

b)　登立天満宮の夏祭り

登立地区にある登立天満宮（**写真-5**）では毎年夏祭りが開催されている．この天満宮は，菅原道真公が鎮座す

る神社であり，道真公が太宰府でクマバチに襲われた際，うそ鳥が現れクマバチを退治したという言い伝えがある．夏祭りでは参拝者が木彫りのうそ鳥（**写真-6**）を交換し合うことで 1 年の福を祈念するという“うそかえ”神事が現在も行われている．

登立地区ではうそ鳥の制作も行っており，うそかえ神事の文化のある他地域にも販売している．登立地区の方は現在でもうそ鳥を購入し，自分のうそ鳥をうそかえが行われる際に持参し，1 年間で嘘をついた数だけ交換している．この行為がご利益となり，嘘が帳消しになるとも言われている．

(2) 伝統行事の現況

本節では，ヒアリング調査により現在の 2 つの伝統行事の運営状況について分かったことをまとめた．その後，2 つの伝統行事の現況を明らかにした．

a) ハツカエビス

商店街の日常として行われていたハツカエビスは 10 年程前まで行われていたという．現在登立地区では，一部の店舗で餅等を配布しているところもあるようだが，全体では行われていない．主な原因は，商店街の店舗の減少にあると考えられる．

図-7　ハツカエビスのルート

写真-5　登立天満宮

写真-6　うそ鳥

そんな中，2019 年にハツカエビスを今までの形態とは少し変えて復活させようという動きがあった．以前のような賑わいを取り戻すことは難しいが，伝統として受け継がれてきたものを継承することは重要であり，何かできないかとの声が挙がった．復活の目的は，日頃商店を使っている住民に感謝を示すとともに各商店の良さを周知し，新たな顧客を獲得することであった．開催内容の案は，各商店に協賛商品を頂き来場者に抽選で進呈する，登立地域に籍を置く商店・飲食店に出店を募り各商店の宣伝に繋げる，といった内容であり，以前の商店街の中心的な位置にあった旧 A コープ跡地で行う予定であった．しかし，予算不足や，人手不足，集客数の見込みの低さ等が不安視されたこと及び，提案から開催までの期間が短かったことから，開催は見送られた．

b) 登立天満宮の夏祭り

登立天満宮の夏祭りは古くから行われ続けている．毎年祭自体の運営は登立地区の総代会が主に行っているが，人手不足や後継者不足により，総代会はほとんどの人が地区の区長と兼任している．運営の中でも，祭りのプログラムの作成の役割は本郷地区が担っている．祭のプログラム等の内容は年代ごとに変化しており，数年前までは，高年層の参加者が多かったことから，お年寄り向けの内容だった．しかし，再び子どもたちの祭りへの参加を促すために，数年前より祭りのプログラムを子ども向けに変更した．また，昨年から以前行われていた子ども神輿も復活させた．また，数年前まで天満宮の下に相撲の櫓があり，伝統的に相撲が行われていた．この伝統も継承するべく子ども相撲を復活させた結果，予想以上に盛り上がりを見せた．このように，子どもたちが楽しめる内容にすることで子どもの参加者はもちろん，大人の参加者もこの 2 年で急激に増加した．本年度は 700 人程が訪れたという．

地域に住む子どもたちに，故郷への愛着心を持たせるための工夫がされていた．このように非日常性のある登立天満宮で行われる夏祭りは，ハツカエビスと対照に，近年盛況している様子がうかがえた．

また，登立地区内の店舗の協力等も多く受けている．子どもたちの参加賞のためのお菓子の提供，屋台の出店，参加者の統計調査等，様々な面からの協力で祭りは毎年成り立っているのである．**写真-7** に 2019 年の登立天満宮の夏祭りの様子を示した．

(3) 伝統行事の変遷要因の分析

本節では，存続されなくなったハツカエビスと継承され続けている登立天満宮の夏祭りを比較し，2 つの祭の変遷の過程をヒアリング調査からまとめ，変遷要因を分析した．

写真-7　登立天満宮の夏祭りの様子（2019 年）

a)　**ハツカエビス**

ハツカエビスは，商店街が栄えていたと言われている1955 年代には地域全体として参加するような大きなイベントの 1 つであった．その後，平成までの長い間毎年開催されてきたが，天草五橋の開通をきっかけに商店街も衰退し，人口も減ったことから，従来ほどの賑わいは失われた．そして，10 年程前に遂にハツカエビスは自然と行われなくなった．ヒアリング調査等からも登立地区の人々は古くから受け継がれてきたことを大切にしている傾向にあるにも関わらず，ハツカエビスが途絶えてしまった原因を考察した．その結果，ハツカエビスは登立地区の生活の中心地であった登立商店街で行われており，商店街は生活の中心地であったが故に，年代を追うごとに変化していったインフラの影響を直接受けていたからではないかと分析した．このことがハツカエビスの変遷要因であると考えられる．

b)　**登立天満宮の夏祭り**

登立天満宮は，寛永年間（1624-1644 年）に創立されたと言われている．1867 年に郷社に列格したが，それまでの間の経緯は定かではない．前節でも述べたように，毎年 7 月に行われる夏祭りでは，うそ鳥を交換しあううそかえ神事が行われている．これは，登立地区が栄える以前から存在していた風習であり，現在まで継承されている．人口減少や少子高齢化により祭りへの参加人数や参加者の年代層の変化はあったようだが，ハツカエビスのようにインフラの変遷の影響を直接的に受けたことによる変化はなかった．それでも祭りを継続的に行うための工夫は住民により行われていると調査の結果で分かった．これは，祭りを途絶えさせず継続するために変化させていることであると考えられる．古くから地域で受け継がれてきた文化を今後も継承していくためには，若い世代の力が必要である．ヒアリング調査の中でも，総代会を中心に，祭りへの若い世代の参加者を増やすための工夫を考えておられることが印象的であった．このことが，登立天満宮の夏祭りを継続させるための変遷要因だと考えられる．

(4)　コミュニティの存続における伝統行事の役割

本章では，商店街のコミュニティのお祭りであるハツカエビスと，地域全体のお祭りであり，地域のコミュニティ中心に運営している登立天満宮の夏祭りについて扱った．一方が継承され，一方が継承されていない要因として，インフラの変化が大きいと考えられる．ハツカエビスは，人々の生活に密に関わるであろう商店街地域で行われたお祭りであり，日常の中の一部であるという側面を持つため，インフラの影響を受けた．それに対して，登立天満宮の夏祭りは，日常の暮らしとは少し離れた天満宮という特別な場所で行われるため，インフラの影響をほとんど受けていない．しかし，祭りの内容としては年代に合わせて変化をさせている．つまり，インフラや歴史の変化を受けやすい人々の暮らしに密接している部分ではなく，非日常である，特別感を感じられる部分の方が，長く伝統的に受け継がれやすいということが考えられる．

登立地区では，都市構造や生活環境の変遷の中で，変わらず受け継がれてきたものが登立天満宮の夏祭りであった．このお祭りに関して，登立天満宮の夏祭りは年に一度のお祭りであり，非日常性や特別感があること，住民主体の地域コミュニティが運営していること，古くから受け継がれているが祭りの内容は少しずつ変化していることが明らかとなった．つまり，祭りをはじめとした目に見えない伝統文化を継承させるためには，その内容を地域の現況に合わせて変化させていく必要があると考えられた．そして，このことは祭りが受け継がれている要因であることが分かった．

5.　おわりに

(1)　各章のまとめ

2 章では，登立地区が現在の姿に至るまでの過程を整理し，都市構造の変遷を明らかにした．登立地区は港町であることが特徴であり，登立港は島で一番主要な港として流通の面を支えてきたが，天草五橋の架橋により，その役割を失ったことが明らかとなった．

3 章では，登立商店街地区の生活環境の変遷を明らかにする為に，登立商店街に着目し，生活環境の変遷過程を整理した．その結果，コミュニティの面で，地域活動が盛んに行われており，まちも賑わい人も多く在住していたが，インフラの変化により生活環境が変化したことが明らかとなった．

4 章では，登立地区で行われてきた 2 つの伝統行事に着目し，コミュニティの存続における伝統行事の役割を考察した．生活環境の変遷のなかでも，伝統行事の開催等，古くから行われている地域活動の継続がコミュニテ

ィの存続に繋がるということが明らかとなった.

(2) 結論

本研究の結論として，住民が非日常のなかにも地域らしさを見出すこと，アソシエーション以外の地域コミュニティが主体となり活動を行うこと，都市構造や生活環境の変遷に対してその変化を受け入れていくことの 3 つが明らかとなった.

また，これらのことは，登立地区の地域らしさを形成するものの 1 つであり，地域コミュニティの継続性の要因となることが明らかとなった.

謝辞：本研究を進めるにあたり丁寧なご指導と的確な助言を頂いた田中尚人先生をはじめ，ご協力頂いた上天草市役所，登立地区の皆様には厚く御礼を申し上げます.

参考文献

1) 土居洋平：「地域コミュニティ問題」の現状と課題～農村を中心に，その問題の構図を探る～，共済総研レポート 特　別非営利活動法人 地域交流センター 理事・研究員 （慶應義塾大学 関東学院講師）2008.2
2) 藤本啓二：伝統行事と地域活性化の課題～国東市岩戸寺修正鬼会を素材にして～『伝統文化』が息づく 地域社会の維持・継承，大分県本部／国東市職員労働組合・自治研部
3) 大森祐基，田中尚人：お法度祭にみる益城町平田の農村コミュニティの変容に関する研究，土木学会，土木史研究講演集，pp. 301-306，2018.
4) 根岸亮太，後藤春彦，田口太郎：祭事が地域運営に与える影響に関する研究～埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として～，日本建築学会計画系論文集 第 622 号，pp.129-136，2007，12.
5) 木田恵理奈，後藤春彦，佐藤宏亮：商店街振興組合による祭礼運営を通した地域コミュニティ形成に関する研究～高松市丸亀町商店街を例として～，日本都市計画学会都市計画論文集 Vol.46 No.3 2011. 10
6) 山口恵一郎：日本図誌大系，朝倉書店，1997.
7) 上天草市史大矢野町編近現代部会：上天草市史編纂委員会 大矢野町編 4 天草の門，2007.
8) 安田宗生：上天草市史編纂委員会 大矢野町編 5 島の暮らしと祭り，2008.
9) 熊本県中小企業総合指導所：大矢野町登立商店街診断報告書，1973.
10) 国土交通省国土地理院：国土地理院地図

（？受付）

STUDY ON THE CONTINUITY OF LOCAL COMMUNITY IN NOBORITATE AREA

Asuka KAWABATA，Naoto TANAKA

In recent years, depopulation has been progressing in local cities due to the decline and decrease of communities, and the survival of communities is necessary for maintaining villages. The purpose of this study is to analyze the current situation and history, focusing on the changes in the living environment and local activities in the port town of Oyano-cho, Kami-Amakusa-city, Kumamoto Prefecture, and to clarify the factors for maintaining the local community. Then, the transition of the living environment nearby the Noboritate shopping district and the traditional customs that have been practiced for a long time have been arranged, and the background to the present situation have been analyzed. Then, we analyzed the structure of the local identity of the Noboritate area, and clarified the factors for maintaining the local community.